
AM9:02

etc

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AM9:02

【Nコード】

N6353I

【作者名】

etc

【あらすじ】

どうしても朝が起きれない少年。いつもの様に遅刻し、いつもの様に先生に怒られる予定だった…。しかし、この日から少年の学校生活が急変する。

late coming

目覚ましの鳴る音。

多分、結構前から鳴っていたような気がする。

「おい。本当に悪かったから開けてくれよ。」男性が一生懸命ドアを叩いている。

「あんた今何時だと思ってんのよ。朝帰りとはいい度胸ね。」キー声の女性がドア越しに怒鳴っていた。

いい目覚ましだ。これなら毎日遅刻せずに起きれる。

少年はそう呟きながら冷蔵庫の牛乳を飲み干した。

あれ？

何か忘れていたような…

カレンダーを目にしたあと足下で頑張って喚いている目覚ましに目をやった。

「ああ。今日も遅刻だ」

今更急いで学校へ向かって遅刻には変わらないわけで、小さな商店街をだらだら歩きながら色々考えていた。

先生を納得させる言い訳や隣で朝から修羅場を迎えていた夫婦のこと。今何処にいるかも分からない兄貴のこと。

学校は商店街を抜けて川沿いを10分ぐらい歩き、その喫茶店を左に曲がった所に津河高校がある。普通は自転車通学出来るのだから、あいにく自転車を買うお金はないわけで、それに歩いて通る川沿いが好きだったのでそれほど欲しいとも思わなかった。

商店街を抜けた所で遅刻の言い訳がまとまりかけていた。昨日は牛

乳が腐っていてトイレに引き込もっていたら、いつの間にか時間が進んでいた。っと、ちよつと無理な言い訳をしまっていたため、もう同じ言い訳は使えなかった。なにしろ、目覚ましが壊れて…とか自転車壊れて…などの言い訳は初っぱなに使ってしまったために、今更使っても当然納得してくれるわけがなかった。

学校に行く途中に車に引かれそうな子を助けて、家まで丁寧に送って差し上げたので遅刻しました。「よし。これでいこう。」

正直、もう何を言っても納得して貰えないだろうと殆ど諦めていた。次は遅刻対策を練ろうとしていたときに、前からトラック走ってくるのが見えてきた。

そんなに珍しくもなかったが、何故か今日に限っては気になって仕方なかった。多分、助けるとかふざけた言い訳を考えているせいだろう。

少年の反対側の歩道で、中学生が自転車を必死に漕いでいた。君も遅刻したのか？と優しい眼差しで見送った。

時計に目をやる。

AM 9:01

惜しい。もうちよつと早く見ていれば9時ジャストを目撃したのにと、悔しがろうとしたとき

ガシャン。

何かが倒れる音がした。

恐らく自転車だろう。

少年はとっさに音がした方に視線を向けた。

さっき、必死に自転車を漕いでいた中学生が倒れていた。道路に。

「まずい。」少年からは、倒れている中学生の前にトラックが走ってくるのが見えた。距離は10mぐらいだろうか。スピードも結構出ているため、轢いてしまう前に止まれそうになかった。

まさか、言い訳が本当になるとはな。こういうのをなんと叫びたかと、眩きながら中学生に向かって飛び出していた。

助けたら遅刻免除かな？
あり得るかも知れないな。

少年が中学生に4〜5mまで近づいたとき、トラックはすぐ前まで来ていた。
中学生が悲鳴をあげる。

駄目だ。間に合わない。
少年が諦めかけていたとき、
トラックが中学生を紙一重でかわした。

よかった。少年は一瞬安心し、油断し、トラックを見る。
トラックはブレーキをかけているいるが、しばらく止まれそうになかった。それより、自分に向かって来るのが気になった。
5m。4m。3m。

その時、考えていた言い訳を思い出した。
2m。1m。止まれそうになかった。
「あれ？少し違ったな。」

時計はAM9:02を表示していた。

携帯の呼び出し音。

「晴樹出ないな。」少年がやれやれと言う顔で携帯電話を手にして
いた。

少年の隣に少女が近づき、興味津々に話しかけてきた。

「多分、まだ起きてないな。アイツ。」彼女も少年と同じような顔
をしていた。

「三宅、お前晴樹と近所なんだろ？毎朝起こしてやれよ。」

彼女は本気で言ってるのかと、少年に睨み付けていた。

「嫌だよーめんどくさい。だいたい、私には何のメリットも無いじ
ゃん。」

「いいじゃねーか。幼なじみ何だし。晴樹も本当は来て欲しくて遅
刻してるのかもよ。」笑いながら携帯電話をズボンのポケットにし
まう。

「冗談でしょ？何で私なの。康介だって幼なじみじゃん。」

「三宅のほうが古い付き合いだし、三宅が行ったら効果あるんじや
ないかなー。」康介は机の中から数学の教科書とルーズリーフを引
っ張り出しながら話す。

「1日しか差がないじゃん。私がアイツと話した次の日に、アンタ
が転校してきたんじゃない。しかも、どちらかと言えば康介のほうが
家近いし。」

「晴樹もチャリにしたら、多少は早く来れて楽なのにな。あ、でも
アイツ自転車持ってなかったなー。あれだけ自転車にしろって言っ
た…………。」

康介は惚けて、話を強制終了するつもりらしい。三宅は咄嗟に康
介の考えていることがわかり、深い溜め息をついた。

「先生遅いなー。」教室の時計に目をやる。時計は9時3分だった。

c o f f e e

チャイムの鳴る音。

少年は、はっと気がつく。

何処かの店の中らしい。天井にはプロペラが回っており、店内にはジャズが鳴り響いていた。多分、知らない人の歌だと思いながら上半身を起こした。目の前の机にはコーヒーが置かれていた。何かなんだか分からないまま、目の前のコーヒーに手を伸ばした。ちょうどいい温度で、香りもよよかったが、無糖ブラックの苦さに顔が歪んだ。

「ちよつと君には早かったかな？」カウンターから、中年男の低い声が飛んできた。

「あと、5年ぐらいしたら飲めそうですね。」

それから沈黙が続き、コーヒーを飲み終えたあと恐る恐る口を開いた。

「あのー。此処何処ですか？記憶が無いんですが…」

中年男は微笑みながら少年を見ながら話した。

「聿河高校の近くの喫茶店だよ。君、聿河高校の生徒だよな？なら知ってると思うんだけど。」

「はい知っています。毎朝通りますし。」このとき、頭の中で朝の事故の記憶が蘇ってきた。

「あれ？俺、トラックに…」

「轢かれたよ。」マスターは少年が話し終える前に、答えた。

「そして死んだ。一回ね。」

唐突すぎて何を言っているのか、少年は理解できなかった。

「あーごめんごめん。ちよつといきなり過ぎたかな？」マスターは笑いながらテレビを付けた。

テレビには、少年がさつきまでいた川沿いの道が映っていた。トラックが見事に大破していた。目撃者の証言や事故の原因などリアルに報道されていた。

でも、俺は此処に居る。

不安そうな顔でマスターを見る。「あー言わなくても分かるよ。何で俺は此処に居る？でしょ？」

そういつてマスターは、携帯電話を取り出し何やら読み始めた。

「2006年9月30日AM9:02 成宮 晴樹死亡。チケットを持っていたため、hellへは逝かずに裏切り者として再び存在する。」

「裏切り者？」

「うーん。まあ簡単に言う超能力者だね。普通は死んだら逝っちゃうでしょ？でも、逝かずに超能力を手にして此方でもう一回生きるってことかな。で、その存在条件はこの携帯電話に来るメールの依頼遂行しなければ即サヨナラ。今ので分かった？」マスターは例の携帯電話を机に出した。

「はい。」嘘だった。全く理解できなかった。

「だから君は今まで通り、晴樹として遅刻して、学校に通えばいい。違うのは超能力で依頼遂行しなければいけないだけ。質問は？」晴樹が飲み終えたコーヒークップを片付けながら説明した。

「あー。俺の超能力は？」

「まだ分からない。超能力は依頼中しか出ないからね。他には？」

「ないです。」また嘘だった。

晴樹は横にあるかばんを手にながら席を立った。

「ご馳走様でした。マスター。」マスターは机を拭いていた。

「困ったことがあったら、また来な。あ、」思い出したようにマスターが口にした。

「コーヒー代、350円。」

「いい商売してる。」

そう言ってドアを開けた。

鈴の音がうるさいくらい鳴った。

W e l c o m e !

マスターの話によると、成宮 晴樹君はこの日、いつもの様に遅刻し、学校へ向かっていた。ただ、いつもと違うのは、登校前にトラツクに轢かれて死んだらしい。普通はそのまま天国か地獄へ逝っちゃうんだけど、選ばれて此方の世界で仕事しろって事らしい。依頼された仕事を失敗すると天国が地獄へ送られるらしい。その時、初めて此方の世界で死んだことになるらしい。で、その仕事を手伝ってくれるのが、超能力らしい。選ばれた人は必ず使えるらしいのだけど、俺はまだ見た事ない。仕事中しか超能力が使えないらしい。

晴樹は頭の中で、マスターに言われた事を慎重に整理しながら下駄箱に靴をしまった。

で、超能力者のことを「裏切り者」と言うらしい。その意味は色々あるらしいのだが、これは後にしよう。その「裏切り者」は、世界に結構いるらしく、俺の通っている聿高にも、何人かいるらしい。まあすぐ解るらしい。

誰もいない静かな階段をだらだら上がる。廊下から他のクラスの授業をする先生の声がする。

晴樹が自分の教室のドアを開けようとしたとき、手が一瞬止まる。

「あ、言い訳。どうしよう。」考え直す時間を貰えずドアが開く。

「今日はどんな言い訳だ？成宮君？」

「おはようございます、先生。」「お昼だよ。こんにちはだ。」笑

つていたが、目は笑っていなかった。

「言い訳は？」またかというような顔をしながら、質問を繰り返す。
「朝、トラックに轢かれそうな中学生を助けようとして、それで何故かその喫茶店のマスターにぼったくられて…遅れました。」
自分でも何を言ってるか分からなかった。

先生は笑っていた。今度は目も笑っていた。クラスメイトも笑っていた。中には、笑い声がうるさいのか貧乏揺すりしている生徒もいたが、どうでもよかった。晴樹には、何故笑っているのか分からなかった。

「で、その中学生は助かったのか？」笑いながら質問を続ける。

「勝手に助かりました。」真面目に答えた。事実だ。

さつきよりも、笑い声が大きくなる。先生ももういいと顔に書いてあった。「入れ。」席に向かうまでにあることに気付いた。さつき貧乏揺すりしていた奴が、クスクスと小さく笑っていたことに。意味はないが、むしように腹が立った。

席に着いたとき、後ろから女子生徒の声がした。どちらかというとなみtainな喋り方だが、多分女の子だ。

「大冒険どうだった？」

「まあまあかな。超能力が使えるようになったらしいし。でも、オチが悪かったな。」

「へー。どんな能力なの？」

「分かんない。」

「そう。」やけに落ち着いた声が返ってきた。

「それより菜月、朝の授業のノート見せてくれよ。えーと、数学と現代…」

話し終える前に後ろから、ノートが三冊飛んできた。ノートには、数学、現代社会、英語と書いてあり、どのノートにも「三宅 菜月」と書いてあった。

「どうも。」ようやく俺のことが分かるようになったかと心の中で褒めた。

ノートを開くと紙が一枚折られて入っていた。開くとそこには、綺麗な字で一言書いてあった。

「裏切り者の世界へようこそ。」

c a t

晴樹はどうしても落ち着かなかった。周りから言わせれば、これはいつものことなのだが、後ろから見えないもので殴られている気がした。菜月がどうしても裏切り者のことを知っているのか、それに幼なじみが何者なのか気になって授業に集中出来なかった。晴樹は早く授業が終わってくれと心で唱えた。

チャイムの音。

周りに聞こえない程度の声で菜月に話した。

「ちよつと来い。」

階段を上るとき二人とも一言も喋らなかった。額から嫌な汗が吹き出ているのが分かった。

四階まで来たとき、目の前に少し錆び付いた鉄のドアが見えた。晴樹が力一杯そのドアを押すと、嫌な音をたてて開いた。そこは、バレーボールコート一個分の小さな屋上だった。

晴樹が手すりにもたれながら話した。下には体育館に移動する生徒達が見えた。

「次、何だっけ？」

「全校集会。なんか一年生の子の財布がとられたんだって。朝。だから全校集会。」

「一年生の中で起きた事件だろ？それなら学年集会じゃねえか。」
「そうなんだけど、登校途中にカツアゲされたらしくて、一年生が

犯人じゃないかも知れないんだって。」「菜月はめんどくさそうに話した。

「出てくるわけないのにな。時間の無駄だ。」

菜月はもつともだと頷いている。

「依頼来た？」菜月がさりげなく聞いた。

「いきなりか。まだ来てない。」「そう。」

ちよつと残念そうだった。早く能力を見たかったらしい。

「お前も裏切り者なのか？」

「そうだよ。私は物体の生命力を操作出来る能力者だよ。」「菜月は笑顔で答えた。

「いつから？」

「聿高入つてすぐ。階段から落ちて。ダサイでしょ？」

「うん。ダサイ。」「笑っているフリをした。

「晴樹は？」菜月が興味津々で聞いてきた。

「展開はさっきの言い訳といっしょ。中学生を避けたトラックが助けようとした俺に来て……。」

「超ダサ。」「菜月は爆笑していた。

菜月が笑いを堪えながら話した。「あ、私依頼入ってるし見に来る？」

「是非とも。」「能力者と言うのをまだあまり理解していなかったの
で、いい機会だと晴樹は思った。菜月は赤い携帯電話を見ながら話した。

「えーと、依頼は……今日中に猫を治療しないとイケないんだって。
まあ楽勝ね。」

「猫？」

「うん。猫。」「自信満々に答えた。

「じゃあ詳しい事は放課後ね。そろそろ時間の無駄な全校集会始まるし、行く。」「そういうと菜月は晴樹を一人置いて行ってしまった。
「猫??」晴樹は溜め息をついた。それから菜月のあとをダラダラ

追った。

チャームが急がせるように鳴っているように聞こえた。

予想通り全校集会は時間の無駄だった。校長先生が額の汗をハンカチで拭きながら一生懸命呼びかけていた。

「私はこんな卑怯者がこの学校にいるとは思いませんでした。自分のした行為がどれだけ恥ずかしいことか分かったのなら、今すぐ出てきなさい。」

これで出てくるなら、校長あなたは選挙戦にでも出た方がいいと晴樹は思った。自分の前の生徒が指遊びしているのをぼーと見ながら菜月の依頼の事を考えていた。

「猫か?。」晴樹は一人呟いた。小学生の頃、我が家で飼っていた猫が自分の目の前で轢き殺されたのがトラウマになっていた。晴樹はまた溜め息をついた。

校長先生の演説は30分続き、終わる頃には三角座りのまま寝ている生徒もいた。晴樹も良く耐えたと自分を褒めた。

教室に帰ったら直ぐにホームルームだった。先生は全員が揃うのを確認してから口を開いた。

「今日は掃除無し。ホームルーム終わり。よし、全員帰れ。」
言い終わると同時に運動部の生徒が教室から飛び出していた。

晴樹がかばんに筆箱を詰め終わったとき、後ろから菜月の声がした。
「そろそろ行こっか。」菜月はニコニコしている。

「うん。」 晴樹はシュンとしていた。

「猫か？」

blood sucker

菜月に連れられるまま10分。着いたのは人気の少ない道路だった。ガードレールもなく、人が歩いて通るには少し危ない所だ。

「あ、猫。」菜月が猫に駆け出した。晴樹も嫌嫌連れていかれた。そこに倒れていたのは、死んだ猫だった。近くにタイヤの跡が残っており、轢かれて死んだことが分かった。

菜月は近くに落ちていたクルマのヘッドライトの破片を拾ってきて猫の隣に置いた。

「見てて。」菜月は真剣な眼差しで猫に左手を当てた。次に、右手をヘッドライトへ当てた。

晴樹は驚いた。

猫の傷がみるみる治っていった。傷が全て無くなると次は、耳がピクリと動き出した。さらに、足も痙攣し始め、尻尾も動いた。

最後には目も開いて、自分で立ち上がり礼も言わずに雑木林の中に消えて行った。

猫は確かに死んでいた。晴樹は驚きながら、雑木林に消えた猫を目で追っていた。

パリン

何かが壊れた音がした。ヘッドライトの破片は粉々になり、砂みたいになっていた。

「はい、ミッシェンコンプリート。私の能力分かった？簡単に言う

とさっきの猫の生命力は0。ヘッドライトが90ぐらいかな。結構最近に壊れたみたいだし。で、私はヘッドライトの生命力を猫に送り変えた。それで猫は90ぐらい。ヘッドライトは0ぐらいになったわけ。」

「なるほど。勉強になりました。」

晴樹は菜月が少し怖くなった。俺もヘッドライトみたいに消されるのかと想像すると顔が真っ青になった。

「どうした？顔真っ青。」心配そうに晴樹を見つめた。

「一ついい？」真っ青のまま質問した。

「人の生命力を吸ったことは？」「あるよ。」菜月は何故そんな質問をするのか分からなそうだった。

「そうか。」晴樹はそういうと俯いて喋らなくなった。

その様子を見た菜月は、質問の意味が分かり慌てて言い直した。

「半分だけ使わせて貰った。その人生きてるよ。そもそも、私の能力はあくまで治療。人殺しじゃないよ。」

「殺せ。って言う依頼が来たら殺すんだろ？」

「来ないよ。知らないの？自分の能力にあった依頼しか来ないんだよ。」微笑みながら晴樹に説明した。

「じゃあもし、俺の能力が暗殺系だったら…。」視線をまだ下に向けたまま聞いた。

「しょうがいね。諦めな。」菜月はそういうと晴樹の背中を優しく叩いた。

「そんなあ？。俺もその能力が良かった。」視線を菜月に戻して話した。

小さな子供が新しい玩具を見せびらかすように菜月が自分の能力を自慢していた。

そのとき、聞きなれない着信音が鳴った。晴樹のかばんの中からしている。

「この着信音…依頼だ。」菜月は目をキラキラさせていた。恐らく

俺の能力を見て馬鹿にするつもりらしい。なんとも嫌な女だ。

晴樹は恐る恐るかばんを開けた。そこには、黒い携帯電話鳴っている。携帯電話を開いて、受信ボックスを見える。

「内容は？」

携帯電話の画面を見せながら話した。

「財布の奪還。」

mission

from joker

依頼者： 一之瀬 一馬 17歳

今日早朝、聿河高校へ登校中に財布を恐喝される。

依頼：財布の奪還

詳細：能力の解放許可。

ターゲットには、赤いマークでサインされており、明日の8時45分までに依頼者の机の中へ届けよ。

それでは、依頼を遂行したまえ。

- end -

晴樹の黒い携帯電話の画面にはこのように表示されている。晴樹が心配そうに菜月に尋ねた。

「これだけ？」

「十分じゃん。マークでサインされてるし、すぐ分かるよ。あ、ちなみにサインはこのメールが来た人にしか見えないよ」

辺りを見渡す。しばらくすると晴樹の目が止まった。駅の近くに赤いマークで「target」と大きく書かれていた。

「なるほどね。少し大雑把だな」

「面白いでしょ？ターゲットに近付けば付くほどマークは小さくなっているんだよ。最終的には大人一人分ぐらいの大きさになるん

だよ」菜月は説明し終わると、嬉しそうに晴樹を見た。よく見るとどや顔をしていたので、晴樹は少しムカついた。

「さっさと終わらせよー。私もいつしよに行つてあげるよ、新人くん」

「ありがとうございます、先輩」

菜月の言う通り、ターゲットに近付けば付くほど小さくなっていった。

「まだ能力出ないな。コツとかあんの？」

「んー、私は最初金ちゃん走りをして能力を出したけど……」

「嘘だな」

「バレたか」菜月は少し残念そうだった。

「バレバレなんだよ。この悪趣味女」

そのとき、50m先の歩行者用信号機が点滅しているのに晴樹は気がついた。

「あつ、信号が変わる。急ぐぞ」菜月が何か言おうとしていたが、無視し地面を強く蹴った。走っている最中歩いている人達が、やたらトロく感じた。よし、間に合いそうだ。晴樹はそう呟きながら足の回転数を上げた。

「間に合った」晴樹は息を切らしながら菜月を見た。菜月は50m先でポカンと口を開けていた。

「アイツ、トロくなつたな」そう言いながら横にある歩行者用信号機を見た。信号機はまだ点滅している最中だった。

「へ？」

菜月は信号機が変わるのを待ってから晴樹の所へ遅れて来た。

「今どうなった？」

「分かんない。気がついたら隣に晴樹がいなくて、そしたら、信号渡った所に晴樹がいて、何、アンタの能力ってテレポート？」菜月は興奮している。

「分かんない。ただ周りがやたら遅く感じた」今のが能力だと晴樹はやつと気がついた。

「時間を遅める能力かな？」

晴樹は依頼の事を思い出し、ターゲットを見た。赤いマークのサインはさっき見たときよりもひとまわり大きくなっていた。

「ターゲットが移動した。行くぞ」

晴樹は一人考え込んでいた菜月を引っ張りターゲットを追った。

赤いマークのサインが小さくなっていつている。近づいているのか？と晴樹はまだ考え込んでいる菜月のかばんを引っ張りながら自動販売機の前を通り過ぎた。

「この辺りは…」晴樹は携帯電話のGPSで地図を見た。

「私鉄の高架下か…」晴樹は小さな倉庫を左に曲がった。赤いマークのサインが大人一人分ぐらいの大きさになっていた。

「アイツか」晴樹は掴んでいたかばんを勢いよく離す。離れた勢いで菜月が後ろにひっくり返りかけた。

「何？」菜月はびっくりしている。

「ターゲットを見つけた。あれだ」晴樹はマークの方に指差して言った。そこには、金髪の男が一人タバコを吸っている。周りに3人同様にタバコを吸いながら雑談していた。恐らく仲間だろう。

「ミッシヨンスター」

晴樹は勢いよく地面を蹴った。次は自分でもハッキリと能力が発動

したのがわかった。タバコの灰が地面に落ちるとき、金髪の男の前に晴樹が現れた。

「財布返せ」「だ、誰だ、お前」金髪の男がびっくりしてタバコを口から落とした。晴樹はタバコが地面につく前にタバコを掴んだ。「落としたら火事になっちゃうよ、先輩方」

金髪の男がいきなり殴りかかって来た。男の拳を難なく避けて、男の腹にカウンターを喰らわした。「かなり遅いな」

金髪の男がダウンしているのを見て逆上したのか、三人一斉に襲いかかっていた。左から、鉄パイプ、ナイフ、太い木の枝をそれぞれ持っていた。

「その戦い方は賢くないな。特に鉄パイプと枝は」そういうと晴樹は相手が動く前に鉄パイプには腹に肘を喰らわせ、枝には手の甲に持っていたタバコで根性焼きを喰らわせた。ナイフは晴樹を見失っていてまだ探していた。

「ぎゃああああ」枝が手の甲を押さえながら喚いていた。

「近距離戦では、鉄パイプとかは振りかぶったら勝ち目が無いよ。突くならわからないけど…」

そういうとナイフの後ろから延髄をとんと叩いた。ナイフ男が気を失いその場に倒れこんだ。

「ナイフは良かったんだけど、戦い方が駄目だったね。」晴樹は金髪の男から財布を見つけて、それを自分の後ろポケットにしまった。根性焼きをされた男を睨む。男は痛みには耐えながら震えている。

菜月がスキップしながら近づいて来た。

「暴力反対ー。明日、先生に成宮くんが先輩からカツアゲしてましたーってチクってやる。写メも撮ったし…」

「勘弁してくれ。それに、元々一年生の子のдарろ？」

晴樹が逃げ出す根性焼きの男を見ながら話す。

「能力者ってバレたらマズイよな？どうすんの？」

「依頼が遂行されたら裏切り者に関する記憶は無くなるから大丈夫。能力者以外ね」

「そうか。」晴樹は安心した。もしかした全員消さなければいけないのかと不安になっていたからだ。

「能力分かった？私の推測によるとね……」

「音速で動ける能力らしい」そういうと晴樹は足跡に指差した。

そこには晴樹が動いた足跡がなく、金髪の男を始め三人は一步も動いていなかった。

「この足跡は？大きさ違うよ」菜月が足跡を指差して質問した。
「ああ。一人逃げた」

「ミッションコンプリート」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6353i/>

AM9:02

2010年10月28日08時55分発行